

特集

高品質な野菜を 安定的に消費地へ

JAでは「いわて平泉ブランド」を消費地へ浸透させ、消費者からの信頼を得られる産地形成を目指しています。近年は、夏場の高温などにより野菜の収穫量に影響を及ぼすことが多くなっています。今回は、夏秋野菜の本格的な出荷時期を迎え、野菜の取り組みについて紹介します。

JAは6月13日、野菜販売対策会議を開きました。各品目の部会代表者や行政機関、市場関係者などが出席し、令和6年度の野菜・菌茸の販売金額16億1703万円（前年度実績対比110.1%）の計画達成に向けて、連携強化を図りながら取り組むことを確認しました。

生産資材価格の高止まりで厳しい状況が続く中、生産者が安定経営できる生産販売・再生産単価を品目ごとに設定し、市場関係者や消費者の理解を求めていくことなどの園芸事業活動方針に取り組みます。

また、「物流の2024年問題」については、6月から前日荷受け翌日出荷体制として対応し、出荷量などの情報を早期に市場へ発信することにより、有利販売につながるよう努めています。



野菜販売対策会議の様子

園芸事業活動方針

毎年のように発生する気象災害による不安定な収穫量は、農家経営に大きな影響を与えており、気象変動に対応した取り組みが必要であり、特に高温に対する栽培管理の資質向上と技術情報の共有化に努め、生産量の安定を図ります。

農業経営は生産資材費、雇用賃金の上昇など経営環境は厳しさを増しており、このような情勢を打破するべく、収穫量の増大に取り組むと共に再生産価格の検証と販売先、消費地への価格確保に向けた要請活動を展開し収益向上に取り組みます。

また、施設園芸において遊休ハウスの有効活用ならびに施設導入における負担軽減にJA園芸ハウスリース事業化を図り生産拡大の推進等に取り組みます。

園芸産地として目指すべき姿について、組合員、関係機関と連携し、一層の生産量拡大と販売強化に努め、消費地から安全・安心を評価される産地を目指します。

令和6年度野菜主力品目の作付状況と販売計画

	面積 (ha)	生産者数 (人)	目標数量 (t)	販売金額 (千円)	前年出荷 金額対比 (%)
トマト	15.62	106	1,250	406,250	107.3
ピーマン	14.30	173	1,190	434,350	112.3
ナス	10.64	72	800	256,000	111.0
キュウリ	10.36	83	950	256,500	109.0
ミニトマト	1.70	31	78	48,000	131.5
ネギ	6.80	56	135	40,500	108.6
原木シイタケ		4	1	700	267.4
菌床シイタケ		12	40	32,000	99.0

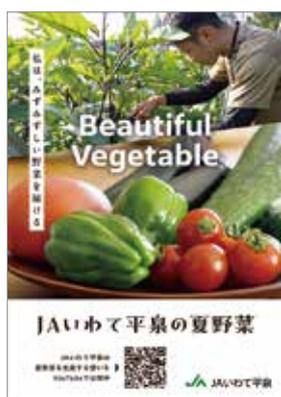
◎トップセールスで産地をPR

JAでは、トマト、ピーマン、ナス、キュウリ、ミニトマトの夏秋野菜5品目のセット販売と、5月から11月の長期にわたる販売をセールスポイントに、生産に力を入れています。

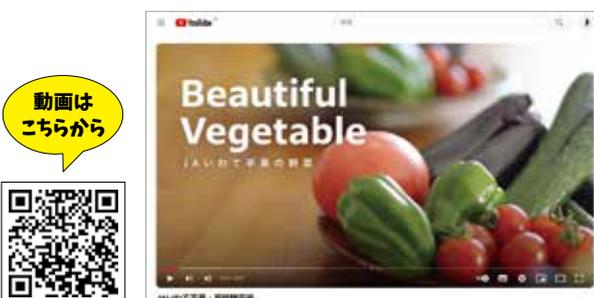
6月25日には東京荏原青果で、夏秋野菜5品目のトップセールスを行いました。

◎動画で産地を発信中

JAでは、夏秋野菜5品目の産地PR動画を作成し、YouTubeで配信しています。また、販売促進活動などで配布するPRチラシも作成しました。



新たに作成したPRチラシ



産地PR動画をYouTubeで配信



果菜5品目の部会代表者も参加しPR

◎LINEによる情報発信を開始

生産者に広く利用されているLINEを利用し、生産に係る気象情報や病害虫発生情報、販売に係る市況などの情報を部会員により早く伝えていきます。



いわて平泉の産地づくりに向けて 夏秋野菜5品目 各部会の取り組み

夏秋野菜主力5品目の各部会では、生産基盤拡大に向けて高温などの気象災害に負けない栽培技術の導入などさまざまな活動に取り組んでいます。今回は、その活動と産地を支える新規生産者や担い手の思いを紹介します。

トマト部会

トマト部会では、9～10月の出荷量拡大策として、秋どりトマトや硬玉品種の導入、高温対策として遮熱資材の利用や外気導入の推進により、出荷量の増加に向けて取り組んでいます。



トマト生産者の

菅原宗一郎さん（二関市滝沢）

就農して2年目です。昨年は、初めて栽培に取り組みましたが、暑さが厳しい年で大変だった経験から、今年は、ハウスに遮熱剤を塗布しました。栽培は思った以上に難しさはありますが、手をかけた分収量が上がったことを実感しました。最初の5年間は、安定して生産できる技術を身に付けたいと思っています。

なす生産部会

なす生産部会では、品質重視の出荷を行い、品質クレームゼロの実現を目指しています。効率的な輸送のため、1-1パレット対応ボールでの出荷を開始しました。市場担当者との情報交換を密にし、有利販売を目指していきます。



なす生産者の

阿部和恵さん（花泉町花泉）

みんなの意識を統一することで、クレームゼロの実現を目指しています。なす生産部会の若手生産者グループでは、「ナスフェス」を継続して開催し、地元を中心にPRを行っています。今年は市外や首都圏に幅を広げ、店舗数も増えました。お店でナス料理を提供してもらうことで、ナスをたくさんの人に食べてほしいと思います。

ピーマン部会



ピーマン部会では、長期安定出荷とクレームゼロに向け、目ざろえ会や定期的な情報発信を行っています。若手生産者グループ「ハッピーまん」の活動を活発に行い、他の地域の若手生産者との交流や、技術向上に向け、知識を高めていきます。



ピーマン生産者の

畠山貴一さん（室根町矢越）

就農して7年目です。ピーマンは扱いやすい品目ですが、収穫量に波があり、昨年は高温による日焼け果の発生も重なったことから、遮光剤の散布などの対策をし、長期安定出荷を目指しています。県南4JAのピーマンの若手生産者で交流もしており、6次産業化に向け、いろいろなアイデアを出し合い何かを作り上げたいと考えています。

きゅうり部会



きゅうり部会では、高温期（7月上旬から9月上旬）のフケ果対策資材（FHフィルム）の使用を継続し、品質の安定を図っています。

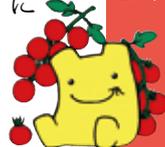


キュウリ生産者の

千葉敦広さん（藤沢町増沢）

昨年からキュウリ栽培に取り組んでいます。トラック運転手からの転身で、ゼロからのスタートでしたが、キュウリ栽培を勧めてくれた近所の生産者の応援もあり、乗り切ることができました。今年は面積を増やし、病気に強く収量が多い品種に挑戦し、昨年より長期間出荷できるように目指しています。

ミニトマト部会



ミニトマト部会では、作型分散により長期安定出荷を図っています。若手生産者を中心に、高温対策資材の検証を行い、9月以降の出荷量の安定化に向け取り組みます。



ミニトマト生産者の

佐々木和典さん（大東町中川）

ミニトマト栽培を始めて4年目です。年により生育が同じではないため、難しさを感じています。昨年は例年にない曇りの影響を受けたため、今年は遮熱剤の使用と誘引方法の工夫、秋どり栽培の比率を増やし、栽培に取り組んでいます。若手生産者で実験的に技術導入し、情報交換を図り、後半の収量を確保していきたいです。